

思いっきり 遊びたいな

大村 璋子



自分たちのつくった小屋の前で。(東京都世田谷区の「桜丘冒険遊び場」)
小屋づくりは、どの遊び場でも大人気。

廃材遊び場から始まった 冒険遊び場

第二次世界大戦最中の一九四三(昭和一八年)、デンマークのコペンハーゲン市郊外に「風変わった「遊び場」が登場した。そこは、きれいに整備された公園とは異なり、廃材やガラクタなどがころがっている空き地であり、子どもたちは思い思いにガラクタを使って楽しく遊んでいた。

この遊び場こそ、世界で最初の冒険遊び場「エンドラップ廃材遊び場」である。この遊び場を創設した造園家・ソーレンセン教授は、長年の観察の結果、「子どもたちは、(自分たち造園家がつくった)綺麗な公園でよりも、ガラクタなどが転がっている空き地や資材置き場で大喜びして遊んでいる」ことに気づいて、そんな場所で安全に遊べるようにとプレリーダーを配置した遊び場をつくったのである。

大戦直後の一九四五(昭和二〇)年、イギリス造園学会副会長や幼児教育世界機構の初代会長などを務めたアレン卿夫人は、このエンドラップ廃材遊び場を訪れ、深く感銘を受けて、その思想をイギリスに持ち帰った。そして、アレン卿夫人はロンドンの爆撃跡地に「冒険遊び場」をつくり、世論を喚起して、冒険遊び場運動を推進した。

やがてこの運動は、大きなうねりとなって、三十数年の間にヨーロッパ各地に広がり、孤島に流れ着いたロビンソンのように何でも自分で工夫してつくりだすスイスの「ロビンソン遊び場」や、牛や馬を飼って、そのフンを堆肥にして農園をつくらしているドイツの「こども農場」、廃材を利用して自分の小屋を建

て、家畜や鳥を飼っているデンマークの「建設遊び場」などのように、それぞれの風土を活かして、さまざまに発展していった。

子ども自身が創造していく遊び場
冒険遊び場運動がこれほどまでに広がっていったのは、その社会状況と決して切り離せない。ヨーロッパでは、自動車が登場した一九世紀後半から、こどもの遊び場がつけられるようになった。それは、こどもが自動車事故の危険にさらされずに安全に遊べる場を確保するという意義はあったが、せつかくつくった遊び場はこどもたちにあまり活用されなかった。

大人がつくった遊び場には、遊び心をかきたてる素材や場の雰囲気、遊びのヒントを与える大人の姿といった要素が欠けていたのである。こうした要素は、これまでの日常生活のなかにはごく自然にあったのだが、自動車の人々の生活空間を細切れに、大人は外に働きに出て、家にはただ眠るために帰ってくるという生活形態のなかで、次第に失われていったのである。

また、アレン卿夫人が著書「都市の遊び場」のなかで書いているように、文明国のこどもや若者たちは食糧や衛生などの直接的な困苦は少なくなったが、抑圧、精神病、暴力、非行、投棄などが増えていたことも大きな要因である。

こうした状況のなかで生まれた冒険遊び場は、地域の人たちが遊び場をつくり運営する活動を通して、現代の都市社会になくなった



動物を可愛がるだけでなく世話もしながら、自然の営みを体験する場。(ドイツのシュトゥットガルトの「エルゼンタールこども農場」)

建築学科学士の務めるプレリーダーが設計し建てた小屋の窓から。(東京都世田谷区の「桜丘冒険遊び場」)



「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを訴える立て看板。(東京都世田谷区の「羽根木プレーパーク」)

要素を取り戻そうという活動である。そこは、こどもをお客さまにしたような、しつらえられた遊び場ではなく、こども自身も創造していく遊び場、小屋づくり、動物飼育、野外料理など、自分がしたいと思うことのできる場である。

住民の手でつくられた冒険遊び場

冒険遊び場がヨーロッパ各地に広がっていきな、こどもの遊びを促進するための国際的な組織をつくらうという動きが活発になっていった。そして一九六一(昭和三六)年、こどもがそれぞれ持っている潜在能力を見つけて自分で育てる機会である遊びを実現していくという人たちの連絡組織として「国際遊び場協会(IPA)」が設立された。

その後、国際遊び場協会は「こどもの遊ぶ権利のための国際協会(IPA)」と改称し、遊び場としてつくられた所に限らず、病院や家の周辺などのいろいろな場所での遊びを保証していく活動を展開している。

日本で本格的な冒険遊び場が試みられたの

は、一九七五(昭和五〇)年から東京都世田谷区の地域の住民が中心になって、夏のあいだだけ開いた「経営冒険遊び場」が最初であった。その後、この冒険遊び場の試みは、国際児童年の幕開けの年でもある一九七九(昭和五四)年に行政と住民によって運営される「羽根木プレーパーク」へと発展した。

これは世田谷区立羽根木公園の一部、約三〇〇〇坪をこどもたちがのびのび遊べる場にしたいもので、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを呼びかける大きな立て札を立てるとともに、創造的な遊びを実現するためにプレリーダーを配置している。

このプレリーダーは、こどもに遊びを教えるのではなく、こどもが自分たちの遊びを展開し、遊び社会を形成していくのを助ける「身近な大人」である。

こうしたプレーパークは、世田谷区だけでなく、すでに三か所あり、同じような考えをもつ遊び場が少しずつ全国に誕生している。

遊びは生きること学ぶ術

IPAは、一九七七(昭和五二年)、国際児童年を迎えるにあたって遊びの重要性を世界中の人に訴える声明文をまとめた。

会議が開かれた島の名前から「マルタ宣言」と呼ばれている宣言には、遊びはすべてのこどもの持つ潜在的な能力の開発に欠かせないものであり、生活であり、探求であり、コミュニケーションであり、自己表現であり、生きること学ぶ術であると謳われている。

水合戦、チャンバラ、どろんこ遊びなどで遊んでいるこどもたちの姿をプレーパークで目にしていくと、「近頃のこどもは遊ばない」といった言葉は信じられない。



「これ、どうやるの？」プレリーダーはたずねられたときに答える人、こどもの年上の友だち。(東京都世田谷区の「羽根木プレーパーク」)

わたしたち大人は、知らぬまに、こどもたちの思いっきり遊びたいという「欲求」を殺いでしまっているのではないだろうか。

学校では工作があまり好きでないこどもが遊び場で小屋づくりに熱中したりするのは、わたしたち大人が、こどもが自分の能力を見つめる筋道を狭くしていることを示しているのではないだろうか。

こどもたちがそれぞれ持っている潜在能力を見つけ育てる機会が遊びなのであり、いいかえれば、こどもが自分の能力を見つめる筋道でできるだけ多様にしていくことが遊びの使命ともいえる。

こうしたこどもの遊びを実現していくためには、まず、大人も遊び、こどもの遊びを刺激し、かきたてる必要があるであり、さらに、こどもの自由さを許容する心と雰囲気や地域社会のなかに育んでいくことが求められている。

遊びは、けっしてこどもたちだけのものではなく、地域社会の人間関係を形成し、地域に生命力を付加する機会でもあるのだ。(おおむらしょうこ・IPA日本支部理事)

＊IPA日本支部・TEL 052 (301) 1554 奥田芳
＊大村璋子・TEL 03 (3420) 5739
＊羽根木プレーパーク・TEL 03 (3324) 9284
＊岩手文庫「冒険遊び場がやってきた!」(森文社)
「都市の遊び場」(徳島出版会)、「こどもと遊びたい」(刊行準備中)